

# 探究学習における上位クラス生の学習行動の波及効果の検証 ～上位クラス生の学習行動は行動に変容をもたらすか～

常翔学園中学校・高等学校 持田 政治

## 実践背景

昨年度は中学2年生の上位クラス(スーパーJコース)単独で、月曜に探究授業(理科学的分野)を実施した。実験日の確保のため火曜と木曜で実施している中学科学部の活動に参加することを許可した。そこでのスーパーJと科学部の生徒の交流でどのような変化が見られるかを観察した。

結果、アンケートと行動観察により、科学部の生徒の主体性が上がった。しかし、スーパーJが影響を与えられたという結果は得られなかった。

本年度は、探究授業をスーパーJの2・3年生で合同実施することになった。そこで、新たに先輩後輩の関係が加わることで昨年は見ることができなかった影響が見られることを期待して活動した。

## 実践方法

### ■ クラス数および対象生徒人数

中学2年スーパーJクラス8名  
中学3年スーパーJクラス8名と科学部18名

### ■ 生徒の特性

スーパーJ: 最上位クラス。主体性が非常に高い。個々に決めた難易度の高い探究活動を実施。  
科学部 : コースに関係なく入部できる。微隕石の採集や水生生物の体内のマイクロプラスチックの採集等を実施。

### ■ 実践期間: 24年4月～25年3月

- スーパーJの3年生は主体性が優れていたため活動方法等について教員からの特別なはたらきかけはしなかった。
- スーパーJの2年生も主体性があるが3年生ほどではなかったため教員からもちかけた「教科書に載っている実験をうまくやる方法を探る」に取り組む班もあった。
- スーパーJ 2・3年生で合同研究班ができるかと思ったがそれぞれの学年別の班ができた。しかし、器具の場所や研究の進め方等について昨年度のアドバンテージを活かして上級生が下級生の面倒をみるようすが見られた。  
科学部の生徒との交流も3年生が主導で面倒をみていた。

## 取得データおよび検証方法

主体性アンケート 72項目 5段階で聴取。  
3を0として  
1～5を-2, -1, 0, 1, 2で合計した。

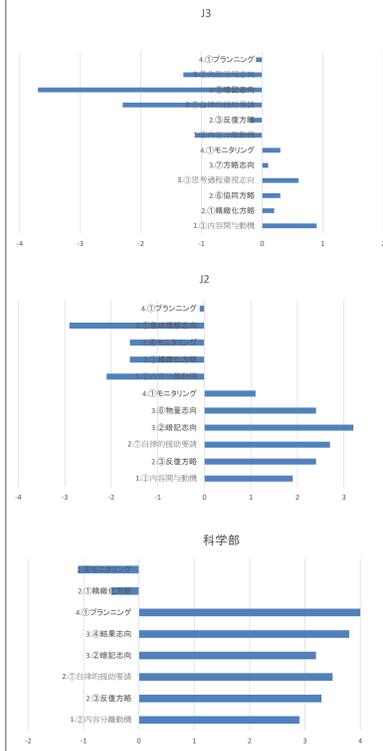
- スーパーJクラス: 7/11(木)と12/17(火)と2/1(土)の3回
- 科学部 : 7/11(木)と12/17(火)と2/1(土)の3回

※スーパーJと科学部両方所属(1名)の生徒は科学部で回答

※ 各項目(1.学習動機・2.学習方略・3.学習観・4.メタ認知)の  
平均値で7月→2月で変化量の大きかったものについて抽出した。  
※ 理論上最小-4 最大+4

## 結果

### 【アンケート推移】



J3はもともと自分で考えて行動するタイプなので自主的に物事を考える質問はほとんど変化がなく、わずかに+だった。「暗記や量的な学習」はもともとわずかに-だったが1年間でさらに-にふれた。

J2はJ3と真逆で、「分からないことは質問をする」や「暗記」が大きく+になり、全体的に最初が低めなので+-どちらの変化量がJ3よりも大きくなった。

科学部は昨年と同様に大きく変化が見られたがJ2・J3に比べて受け身なところが見られる。普段の生活の中で「自信を持って発言」することが増えた。

### 【自由記述】

#### 【科学部】

・長時間集中して勉強を続けられるようになり先生や先輩たちのやり方を少しずつ身につけられるようになった。

#### 【スーパーJ2】

・先輩の勉強方法をみて自分で真似したりして自分の勉強方法が確立されてきた。  
・自分が一度決めた目標に向かって本気で努力できるようになった。

#### 【スーパーJ3】

・後輩と喋る機会が多くなって、引っ張っていけるように場に合った行動を心がけることができたようになった。



## 考察と今後の課題

- 今年も科学部の生徒主体性の向上が見られた。
- スーパーJでも2年生は7月のアンケートから他者をあてにする傾向が3年生よりも強かった。主体性は向上したがアンケートと行動の両方で頼れる先輩がいると頼りにしてしまう傾向が見られた。
- スーパーJの3年生は昨年より自立心の強さが見られたが後輩ができたことでさらにその傾向が高められた。

★それぞれの主体性は向上したが、もともと持っていた気質がさらに増幅される結果になったことから、気質を変えることは難しいと考えられる。

★自立心の高い集団は自他ともに主体性を向上させると考えられる。クラスに自立心の高い生徒が数人いて、うまく作用させることができれば探究授業以外でも応用できる可能性があると考えられる。

# 主体的学習者を育てるための意識づけ ～生徒の自己肯定感を高めるための働きかけを中心に～

常翔学園中学校・高等学校 池澤 友宏

## 実践背景

常翔学園中学・高校一貫コースに所属する高校一貫生は、成績順（Ⅰ類・Ⅱ類）にクラス分けを行っている。また、カリキュラムも難関国立大学に向けてのプログラムを実施している。

ただ、成績順でクラスを分けた場合、自クラスの生徒たちは、一番下のクラスになり、同じ一貫生との学力差、高校から入学した生徒との学力差で苦しんでいる。

さらに、個人面談での聞き取り調査で中学入試での「トラウマ」を抱えている子が多いと判明。また、何かと他クラスと比較されることも多くあり、「学び」に対して苦行のイメージが付いている。

結果、「自分には能力がない・やりたくない・できない」ということを理由に卑屈になる事が多い。「やっても、どうせ無理だ」と自分たちで言ってクラスにそのノームを作り上げる。そのことに悔しがることもなく、現状を甘んじて受け入れて、目の前にある「危機感」にも目を背ける状態。

### 【仮説】

現状：満足感・達成感が得られない状態（自己肯定感が低い）

そもそも学業（勉強）をやりたくない、と感じている生徒が多い  
支援：「やればできる」「ただやっていないだけ」に気づかせる

「やったらできる」として、パラダイム転換させる

結果：「やったらできた」という満足感・達成感を得て、自己肯定感をアップさせ、主体的に学習する姿勢を身に付けさせる

## 実践方法

◆実践の対象：高校一貫コースⅡ類クラス（文理混合29名）  
※高校同学年の全16クラス中、最下位のクラス

◆実践の期間：2023.4月～（現在も引き続き）

◆実践の内容（高1、2年生の2年間）

・4月のスタサポ①でまずは、自分の立ち位置の確認

・4～5月にかけて個別に個人面談

▶何が問題でつまづいているのか共有

▶学習の仕方（認知的な学習方略の指導）の指導

同時進行で、学習を「作業」にしないことを毎朝終礼で伝える。  
「意味のない学習」をやめ、「意味のある学習」へパラダイムシフトさせる

15分学習（動画学習含む）を推奨

（東京大学薬学部とベネッセコーポレーションの調査結果）

・12～1月にかけて個別に個人面談・保護者懇談

▶保護者と現状・情報共有

▶何が問題でつまづいているのか共有

◆生徒に権限移譲し行事を主体的に運営させる

（校外学習・文化祭・留学交流会）満足度100%

▶LHRで「なぜ学ぶのか、なぜ大学に行くのか」1人1人考えさせ、近隣席と情報共有

◆調査方法

・4月・12月で自己肯定感のアンケート調査

・面談での聞き取り調査

・スタサポの生活・進路意識アンケート調査

・成績の変化

・行事への満足度調査

## 取得データおよび検証方法

▶左記の実践方法参照

## 結果

◆判明したこと

・実態把握の為のリサーチ不足だった（行動承認だけの表面の結果ばかり追った結果で、内面からの調査が必要）

・PDCA→RPDCAが必要

・そもそもの自己肯定感は高く、自己効力感が低かった

・存在承認は受けているものの、行動承認が多く評価される学校生活においては、自己を卑下することによって自己防衛していることがわかった

・成績基準に満たない入学者には、厳しい結果

・クラス担任のみでは、解決できず周りの教員も巻き込んでチームとしてのサポートが必要だと改めて実感

・学習への自己効力感と行事での自己効力感との相乗効果は見られなかった

・学習への自己効力感は、内面からのサポートが必要

・負のピア効果が発生している

◆生徒の変化（目に見えての変化）

・自習時間（GT）に生徒たちによる教え合いが始まった

・生徒同士の共に成長していく姿が見られた

・学習に対しての悩みが多くなった

・やり直しに時間をかけるようになった（作業率が減った）

・諦めから、悔しがる姿が多くなった

・他人の点数を気にするようになった

スタサポ（1年）4月D1（37～）→8月C1（43～）

スタサポ（2年）4月C3（39～）→8月C2（41～）

2024年度 スタディーサポート 2年生 2回(27401) 変更 比較対象の設定				2024年度 スタディーサポート 2年生 2回(27401) 変更 比較対象の設定					
進路生活	国語	数学	英語	071:困難に直面してもあきらまずにやり抜く	進路生活	国語	数学	英語	060:計画や目標を決めて学習している
回答	今回(%)	前回(%)			回答	今回(%)	前回(%)		
あてはまらない	10.3	17.2			あてはまらない	6.9	27.6		
あまりあてはまらない	13.8	17.2			あまりあてはまらない	31.0	13.8		
どちらともいえない	44.8	41.4			どちらともいえない	37.9	34.5		
ややあてはまる	24.1	24.1			ややあてはまる	13.8	20.7		
とてもあてはまる	6.9	0.0			とてもあてはまる	10.3	3.4		

2024年度 スタディーサポート 2年生 2回(27401) 変更 比較対象の設定				2024年度 スタディーサポート 2年生 2回(27401) 変更 比較対象の設定					
進路生活	国語	数学	英語	012:現在の気持ちや状況	進路生活	国語	数学	英語	014:悩み・相談したいこと
回答	今回(%)	前回(%)			回答	今回(%)	前回(%)		
勉強が楽しくやる気になっている	3.4	0.0			学習について	41.4	24.1		
頑張ってる伸びた	27.6	44.8			友人について	0.0	0.0		
成績を伸ばしたい方法がわからず悩む	31.0	20.7			これからの進路選択・進学先決定について	20.7	37.9		
勉強は楽しくないがとにかく勉強している	6.9	6.9			部活動のことについて	0.0	3.4		
勉強したくないがしかたなく勉強している	20.7	27.6			家庭や保護者のことについて	0.0	0.0		
勉強が無意味に思える気持ちになれない	10.3	0.0			(家庭を除く) 学校外のことについて	0.0	0.0		
					その他	3.4	3.4		
					特になし	24.5	31.0		

## 考察と今後の課題

2年間通じて、追跡調査したが、大きな変化は見られなかった。自己肯定感が低いというよりも、学習に対する自己効力感が低い生徒が多いことが分かった。小学生の時から「できない」と深く刻まれてる様子。社会的自己効力感は低くないが、自己統制的自己効力感・学業的自己効力感が低く、遂行行動の達成（成功体験）をいかに積ませるかが大きな課題。また、自分の潜在的な能力が低いという自己認識を持たせないような関わりや指導を行うことが重要と考えられる。